The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『南洋日日新聞』に見るインド兵の反乱（1915）
Author(s)	桑島, 昭
Citation	アジア太平洋論叢. 2009, 18, p. 3-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100082
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『南洋日日新聞』に見るインド兵の反乱（1915）

桑　島　　昭*

シンガポールのセラングーン・ロードを中心とするインド人商店街、「リトル・インディア」はいまも賑わいを見せている。その近くにあるドビー・ゴート（華語の表記は「多美歌」）もシンガポールの人々に親しまれている地名、駅名であり、その由来は、ブラス・バサ川の岸（ガート）にあったドービー・カーストの人たちの洗濯場である。他方、第二次世界大戦前、ミドル・ロードを中心に広がった「日本人街」はいまはない。その原因はインドと日本の近代史の歩みの違いに求められるが、1915年は、アジアのそれぞれの地域の歴史がシンガポールにおいて交錯した年、正確には、それぞれの地域の歴史がお互いに絡み合っている事実の認識を求められた年であった。

2006年２月１日から３日間、オークランド大学ニュージーランド・アジア研究所において、「東南アジア－過去・現在・未来」と題する研究集会が開かれたとき、私は、シンガポールにおけるインド兵の反乱にかんする自著（2006年刊、執筆は2002年）[1]の執筆後、頭の中をよぎっていたいくつかの問題についてその輪郭だけを提示した[2]。ここでは、1914年４月１日にシンガポールで日刊日本語新聞として発刊された『南洋日日新聞』を手がかりとして、インド兵の反乱に際しての日本人社会の対応をたどり、これまで十分に内容を展開できなかった部分をできる限り明らかにしたい[3]。

１．反乱勃発直後の『南洋日日新聞』の論説

シンガポールにおいてインド兵の反乱が起こったのは、1915年２月15日の午後、

---

* 大阪外国語大学　名誉教授

その日のうちに戒厳令が敷かれている。２月14日に218号を出した『南洋日日新聞』の次号が出たのは、２月18日である。２月14日は日曜日、15日と16日は華人にとって新年の祝いの日であった。

18日付の『南洋日日新聞』は、同紙の論説と考えられるトップ記事を「印度兵の叛乱」と題する文章で飾った。しかし、その末尾に「付記」として、「印度兵叛乱に就いては検閲の厳重なると官憲の好意的注意に依り一時報道を中止するの余儀なきに至りたるを以って、僅かに本問題に対する鄙見のみを掲ぐることとせり。読者の諒承を乞う」と述べている。反乱にかんする報道に様々の制約があったことは、「歴山（アレクサンドラー引用者註）兵営の叛乱」と題する説明記事の冒頭に、「其の筋の検閲厳重なるを以って、取敢えず発表して差支えなき事実のみを報道し、時機を見て成るべく迅速に詳報すべし」と書いていることからも想像できる。「第五大隊の爆発」「欧州人の避難」「義勇隊の組織」についての説明は簡単なものであった。

16日夜に在留邦人に向けて出された短い藤井領事の「諭達」は、全文が掲載されたものと判断される。最初に「今回当地の暴動は当局機宜の処置に依りて、速かに鎮定すべきを信頼す。此際濫りに流言浮説に惑わされ、軽挙事を誤まるなからんことを望む」と述べ、「万一の場合に際しては、適宜避難方法を指示すべきも、刻下未だ切迫せる状態にあらざるを以って、各自其の業務を荒怠することなからんことを望む」と結んでいる。

新聞規制の状況は、17日、戒厳令司令官により、同日以降シンガポールにおいて発行する新聞の同市以外での配布・販売を禁止するという布告によっても確認することができる。

このような規制のなかで出された18日付『南洋日日新聞』の記事でもっとも注目されるのは、巻頭の論説である。

注目される第一点は、インド兵の反乱に関してその後出された原因論のほとんどがこの論説においてすでに網羅されていることである。まず、「今回の反乱が単純なる意見の不疎通、例えば待遇若しくは上級者に対する日頃の不平不満が何等かの動機に依って爆発したものとすれば、たとえ其の爆発力が甚だしく強烈なるものであったにせよ、反乱悔悟即投降と規則的な経路を辿って旬日を出でず鎮

圧せられるであろう」と論じている。この点は、イギリス側によって反乱直後に設置された査問会議の報告書でも主要な原因として挙げられている。

しかし、同論説は、イギリス支配地域のムスリムの大勢がイギリスの遂行する戦争を支持する方向にあることを認めながらも、次のように、兵士の間での戦闘忌避の気分、そして、インド本国の独立への動きとの関連が原因となった可能性も否定しなかった。

> 然しながら、叛乱の経路が宗教上の信仰若しくはある種の感情に発源せる戦闘忌避にありしと仮定すれば、問題は少々込み入って来ねばならぬ。吾等が聞き込める所にして信ずべくんば、叛乱大隊はスエズか欧州方面の戦線に立つことと早合点して「どうせ死なねばならぬ運命なれば」と捨て鉢に成ったものだと言う。若し幾分然りし事実のありしとせば、ことは陰暗たる独逸の怪掌が彼等回教徒の迷信の隙に乗じて、巧に握手を求めんとして半ば成功したことと看做されぬでもない。更に進んで叛徒が本国と気脈を通じて首尾相策応したものとせば、遂に由々敷大事となりて経過（？、活字不鮮明）されねばならぬ。

『南洋日日新聞』の論説で言及された原因論は、1915年５月に完成した査問会議の報告書で論じられた主要な原因と副次的な原因の分析に通じるものがあり、とくに、第五軽歩兵連隊がシンガポールから移動するのを前にして反乱を起こした経緯について、２月18日、あるいは17日の段階でこのように戦闘忌避の可能性を視野に入れることができたのは、「吾等が聞き込める所」、すなわち情報源がどこにあったかに思いを馳せさせる。「吾等は進んで反乱の原因を研究せねばならぬ。是は同盟（イギリス）国民に対する吾等の好意である、否、義務であろうと思われる」と論説が述べているのは、逆に、この段階でシンガポールのイギリス当局から必要な情報を得ていたことを示すものであろう。

第二に論説で注目されるのは、２月15日夜のシンガポールのインド人社会について、「当市に散在せる大小各種の印度人協会が15日は何れも宵を徹して飲み明かしたと聞いている。果たして然るか。吾等は此の徹宵の乾杯を以って、必ずし

も怪異するものにあらずといえども、而して単純なる感情の発作と解釈せんと欲するものであるけれども、同時に深き根底を有する或るものを想像しない訳に行かない」と述べている点である。「聞いている」と間接の表現を取っているが、新聞検閲の厳しい条件の下で、反乱当日のアジア系住民の反応を記した数少ない報道の一つである[4]。もちろん、この報道が正確なものか、噂にとどまるのかは、この記事だけでは判断しにくい。しかし、噂であるとしても、どうしてこのような形で伝わったかには注意する必要がある。反乱勃発後、シンガポールのすべてのインド人が登録と許可書の取得を求められていたが[5]、それが予防的措置であったのか、なんらかの反乱支持の動きを嗅ぎ取った上での対応であったかが問題だからである。３月２日付『南洋日日新聞』は、「一般印度人は当地政庁の証明書の下付を仰がざるべからざる事は既報の如くなるが、なお未だ該下付を了せざる者に対し、昨日午後６時にオーチャード路警察署にその旨を報じ来るべき様告示さる」という内容を伝え、３月９日付の同紙は、「６日、当地駐屯軍司令官リダウト少将は軍令を以って在住印度人の18歳以上の男子は海上および鉄道何れよりするも警察官憲の許可書なくして当シンガポールを去る事を許さざる旨告示せり」と報じていた。シンガポールのインド人社会に特別に監視の眼が注がれていたことは否定できない。

２月18日付『南洋日日新聞』の論説が注意を引く第三点は、反乱の原因について周到な分析を加えながらも、その最後を「吾等は、同盟国の朋友と共に地方民心の静穏と、而して叛乱の鎮圧とを衷心より祈るものである」と結んでいることである。日本がインドあるいはインド人と敵対関係にあるわけではなく、反乱鎮圧への参加には慎重さが求められるという判断は、シンガポール駐在藤井領事、反乱鎮圧のため音羽・対馬の２隻の巡洋艦をシンガポール港に接岸させた土屋第三艦隊司令官、そして、市内警備のための日本義勇隊の隊長ポストを打診された古川合名会社シンガポール支配人酒井鶴之助などによって、ニュアンスの相違はあれ、共有されていた[6]。しかし、このやや素っ気ない結論は、シンガポール日本人社会のなかに、第一次世界大戦の初期の段階において、日英同盟を既定の方針と考え、市内で起こったインド兵の反乱の鎮圧を当然のことと受け止める空気が存在していたことを示すものである。事実、『南洋日日新聞』においてインド兵

の反乱と正面から向き合った論説・評論はこの一点だけであり、以後、同紙の反乱関係の記事は、原因論を深めることなく、反乱の経過についてはシンガポール政庁による公式発表に主として依存し、全体として、日本人社会を意識した「内向き」のものとなっていった。当局による言論規制がきびしく、報道がそのような方向に向かわざるを得なかったこともあるが、新聞の論調をすべてそれで説明することはできないであろう。

2．邦人義勇隊の結成と日英関係

1915年２月17日には、イギリス側の要請に応え、シンガポール在住の日本人からなる総数186名の義勇隊が結成され、市内の警備に当り、17日には第三艦隊の巡洋艦音羽が入港し、アレクサンドラ兵営の奪回でイギリス軍に協力した。２月19日付の『南洋日日新聞』は「帝国海軍陸戦隊の殊勲」について語っている。しかし、新聞規制の故であろう、内容は長文のものではなかった。この日の同紙の記事において目立ったのは、「恤兵会を組織せよ」と題する巻頭の論説における在留同胞にたいしての義勇隊支援要請の檄である。ここでは義勇隊誕生の経緯については詳述しないが[7]、鳴り物入りの「出陣」とは裏腹に、衣服、食料および宿泊施設は隊員が満足するには程遠いものであった。この不満は義勇隊の解散後も尾を引く問題となった。この論説も次のように具体的な事実を挙げて、在留邦人に隊員への支援を要請している。

「吾輩の友人はゲートルの送達を懇望して来た」「吾輩の店員は莫蓙３枚と雨衣を請求して来た」とは吾等が昨日來しばしば聞く所である。吾等は事変突発後それぞれ班を分かちて断ず吾義勇隊の駐屯せる方面を視察中であるが、いかに堅忍なる彼等といえども、糧食配給の不規則と粗雑なるをしきりに嘆訴せる模様である。

在留同胞よ、君等はこの不体裁なる状態をいかに観測せらるるや。募兵の挙甚だ好し。吾等も大いにこの快挙を賛同するものである。しかも、困苦欠乏は寧ろ戦闘員の誇りだとして、只一概に看過され得べきものであろうか。……

恤兵会を組織せよ。而して、日頃乖背せんとせし感情の蟠りをも此の際截然払拭し、吾勇敢なる義勇隊の後援に最善の措置を講ぜよ。雨衣其の他の被服付属品といえども、之を購入するに左程驚くべき失費にも非ず。若し然らずとしても、各自持合せの１，２点づつを割愛するに於いては僅々２，３日を出でずして調達せらるる訳である。

『南洋日日新聞』記者は、義勇兵が食事を済ませた後に手をつけた料理について、「一口、二口食うて見たら、悪口するのでないが飯は半煮で食われぬ。物足らぬ気もしたが、別に勤務をせぬ自分には堪えられぬ事もなかった」と述べ、寝室用の部屋については、「はいって見れば敷物は一枚もない。毛布は無論ない。おまけに蚊の鳴く音は丸で蜂の巣をこわした様」と描写している[8]。同紙は、解散後にまで尾を引いた義勇兵の不満を、氷屋の言葉に託して、次のように紹介している[9]。

印度兵暴動事件に義勇兵と化けて６日間の珍な生活、いよいよ解隊して見れば別段花々しい行動でも無かったじゃないかと浮世の馬鹿は冷やかす。其れにアワを食ってとにもあらねど、極端な不満から来る悲憤慷慨の叫びは、理智なき自分達の胸からも無自覚的に辿り出た。

そうは言え、６ドルの慰労金は不思議にかの憤慨の熱の幾分を抑圧し得ている。之を見ると、人間は……少なくとも現代の人間の一部分は黄金の奴隷だね……。

しかし、この義勇隊員の不満は、「６ドルの慰労金」で吸収されることはなく、二つの方向に向けられていった。一つは、シンガポールのイギリス当局に対してであり、もう一つは、第一次世界大戦の開始以後急速に増加したシンガポールの「グダン」とよばれる商業中心地（グダンはマレー語の倉庫を意味するgudangあるいは英語のgodownの訛った形といわれている[10]）で活動する日本人たちに向けてである。

前者の代表的な見解は、田村叔七が『南洋日日新聞』に載せた「寄書」である[11]。

「官憲の好意的注意」を受けてから1月足らずの間にこのようなイギリス批判の論調が同紙の巻頭記事として掲載されたことは、義勇兵問題の重要性とともに、この問題を通して日英関係の外交上の深刻な対立点、そして日本外交の姿勢が表面化したと見られよう。田村は、「暴動の鎮定は勿論吾が忠勇なる陸戦隊の力に基きたること絶大でありますが、吾が同胞義勇兵も亦英人を助けて力あったことは内外人の認めて以って疑わざる所と聞きます。果して然らばこの義勇兵に対して領事は如何の慰労をせらるる考えでいられますか」と問い、次のように自らの見解を表明している。

（義勇隊）解散式場に於ける説明によりますとヤング総督に交渉した結果はなお紛議の際故まとまりませんが、英人義勇兵と同等なる待遇すべしとの言質を得たと伺いました。……

英人と同等な待遇をするということは、たとえ内約にせよ如何なる意義を有するものでありますか。採りように依っては列外の者を同列せしめてやるお情けを以って対等の取扱をしてやるとも思われないではないのであります。

元来私等同胞は英領土内にあるも、英国に対して兵役の義務は絶対にない。条約にも昭々乎として定められてます。然るに、印度兵の突如暴動を起すや彼等は周章狼狽殆どなす所を知らず、為に総督は吾領事に懇請して義勇兵を求めたのでしょう。義気に富む吾同胞は急遽加勢し、市の安寧に努めました。自分の職業を打ち捨て防務の任地に就いたのです。即ち義務はなけれども好意を以って応援した訳になります。然るに、英人と同等な待遇をするとはソモ何を意味するのでありますか。義務のある英人と義務のない私共とを混同せられては甚だ迷惑を感じます。……

日本人一般としては御情的同等待遇は御免を蒙りたい。戦線に立つに臨んでは、吾同胞に先発して貰いたい、即ち危険なる場所は日本人に行って貰いたい。自分達は安全な所で防務したいと勝手なことを言われたと聞いています。この例は古来白人間に往々見る所であります。……

然らば、如何に待遇したならば良いのかと言えば、好意を以って臨んだものであるから、好意を以って待遇せられたいというのであります。決して多

寡をいうのではありません。……

わたしらは義勇兵の効能を説いて結果を云々するのではありません。又、報酬を受くる目的を以って応じたのではありません。唯今日に於いて英国の言動が余りに不穏当で、然かも不親切で没常識なのに憤慨するのであります。

殊に吾国は同盟国であります。時に臨んでは利害の打算を別に水火の苦をも辞さぬこともありますけれども、体面を汚さるべき言動と行動とに出でられることがあってはこれを黙止することが出来ない次第であります。

わたしらは総督に右の点を質疑すると同時に、領事がこの点に留意して体面保持の為め、なお格段な交渉と義勇兵をして満足しめんことを希望する次第であります。

「不穏当で、然かも不親切で没常識」のイギリスの言動が義勇隊との関連で具体的に何を意味するかは、「寄書」全体からもわかりにくい。文中に述べられているように、イギリス側が日本の義勇隊を市内警備ではなく、戦闘の最前線に送ろうとしたこと、活動中の義勇隊にたいする待遇の仕方などもこれに含まれているだろう。しかし、なによりも田村の主張の根底にあるのは、イギリス植民地支配下のシンガポールでマレー人・華人・インド人とともに生活する日本人の社会ではなく、「力弱き」彼ら（田村の表現）とは異なり、「無力」のイギリスを支援した「大国」日本の「体面」を汚すイギリス、そしてこれと協力する日本領事にたいして噴出する不満であった。ここでは、シンガポールでの生活者としての立場から、隣人のインド人、そしてインド兵の行動を見つめるという２月18日の『南洋日日新聞』の論調に多少とも見られた視点は後退していた。もっとも、田村のこの「寄書」が出た段階では、それが激しい対英批判に即座につながることはなかった。1915年１月の日本による対華21ヵ条要求に反対する華人のボイコット運動が、シンガポールにおいてイギリスの協力で規制されていたこともあった。

すでに触れたように、『南洋日日新聞』の反乱報道は、戒厳令下の制約の故に、主として政庁の公報に依存し、義勇兵の生活の「裏話」は伝えても、邦人義勇隊の警備活動と第三艦隊の動きについて詳細に跡付けることはなかった。２月21日には、義勇兵の解散式が行われ、慰労会もハリマ・ホールで開かれた。３月18日の同

紙は、前日に、ヤング総督を主賓に、第三艦隊司令官戝部中将も出席して三井物産第一社宅運動場で開かれた第三艦隊連合運動会についてその内容を事細かに描写している。それは、インド兵の反乱鎮圧の活動の終了を告げるものであった。

1915年５月１日、『南洋日日新聞』は、「過去一週年」と題して発刊後１年のシンガポール日本人社会の変遷をたどったが、義勇隊の結成については語ることがなかった。インド兵の反乱そのものは、未だ関係のない出来事として捉えられていたのである。しかし、反乱は、意識するとしないとにかかわらず、日本人の行動、とくに日本の対英意識のなかに影を落としていた。

1915年の５月から６月にかけて、『南洋日日新聞』は、マレー半島のクランタン州で起こった農民反乱についてその動きを政庁の発表などに依拠しながら逐次追っている[12]。

同紙が割いた紙面の大きさは日によって異なるが、これほどまでに執拗にクランタンの農民反乱を追い続けたのは、言葉にこそ表わさなかったものの、ほんの３ヵ月前に起こったシンガポールのインド兵の反乱の記憶が消えていなかったからであろう。実際、５月８日付同紙の記事では、「邦人鎮圧に志願」と小見出しを掲げて「コタバル在留邦人数名は事の急なるを聞くや、州政府に土民鎮圧に参加したき旨申し出でたりとの説あり」と書いている。これは、明らかにシンガポールの反乱に際しての義勇隊結成の経験からの類推である。

他方、クランタンの農民は、世界大戦の勃発による経済的苦境だけでなく、シンガポールの反乱の「成功」の噂に鼓舞されて立ち上がったことが当時のイギリス人高官によって確認されている[13]。シンガポールにおけるインド兵の反乱は、兵士たちすら想像もしなかった地において農民の蜂起を励ますことになったのである。

農民反乱の評価は別としてイギリス側が把握していたこの事実は、日本の情報網には捉えられていなかった。６月３日の『南洋日日新聞』に○△生という匿名で、コタバルから報告を送った日本人の本名はわからないが、分析は冷静で、農民蜂起の原因を「欧州戦乱」による州物産の販路絶無と物価の極度の下落に求め、農民は「暴徒というも、彼らは決して良民を害わず、ただ政府の不徳を憤りて蜂起したるものに候えば、日本人等に少しの害も与えず候」と述べていた。そして、

ここでも日英関係の悪化が日本人についての誤った報道を生み出しているという指摘が加えられている。

> 又当地欧州人は邦人に対し不都合の言動多く、現に去る７日発行の英字各新聞並びに日本字新聞はコタバル在留邦人が暴徒に加担せんとしたりと掲載せり。実に驚くの他なくかかる無根の記事を投稿して、これを半官報たるストレイト・タイムス紙上に記載し、邦人に対する世人の反感を誘致せしめんとする如きの不徳の行為、果して何者の悪戯なるか、当地官憲の一人始終邦人を憎み、ひたすら吾々の発展を阻害せんと努める者あり。或は彼等の悪徳行為にあらずやと思われ候。

この報告にあるように、日本人の「暴徒」加担の報道が各紙に出されていたとすれば、５月８日付『南洋日日新聞』に載った鎮圧への参加意志表明は誤報であったのだろうか。解釈が分かれたのは、『ストレイト・タイムズ』紙の「当局の説明と考えてよい『目撃者証言』」の理解の仕方にあったように推定される。「支援を申し出たと報告されている」というくだりは、前後の文脈からは反乱への支持に見えるが、「当局」の説明のなかで出ているので、対英支援と解釈するのも自然である[14]。いずれにせよ、日本側の対英不信は、インド兵の反乱鎮圧への対英協力にもかかわらず、あるいは、それ故に抑えがたいほど深まっていた。それでも、1915年７月９日付同紙に佃的外が書いた巻頭の文章は、華人の抗日ボイコット運動の規制に際して示されたイギリスの協力が日英関係の一層の悪化を防いでいたことを表わしている[15]。的外は、文体および内容から見て、1915年３月に南洋日日新聞社に加わり、のちに『南洋より』を著わした佃光治のペンネームであろう。

> 又本年梅花の候、印度軍隊星坡郊外に騒擾を発し、英政下の治安を脅し、秩序累卵の危に瀕するや、英軍憲失態殆ど為す所を知らず、夜半総督ヤング倉皇（そうこう）足下の門を叩き、哀訴嘆願、ひたすら援を乞う。……足下この間に処して深謀遠慮遂に総督の請を容れ、同胞より義士を募って兵団を組織し、治

安警備に奏功せり。説あり、曰く彼の内乱に我干戈(かんか)を動かすは盟約の範疇を越ゆ、無断に陛下の赤子を危地に導きたるの罪軽からず、何等国家的条件を付せざりしは非、更に義士の慰労冷やかなりきと、或いは、しかる議論もあらん。然れども咄嗟の場合、何人か万全を期し得べき、況して舞台馴れざる足下の於いておや。唯吾人は足下が英軍憲我兵団成るを見、約に背き之を戦線に送らんとしたる時、忽ち色を為して総督に迫り、其の非を詰まりて能く無事なるを得たり。当時目撃して足下の愛情甚だ濃やかなるを感じにき。

日支交渉開くや、頑冥不霊の徒、帝国の誠意を解せず、徒に吾人を敵視し、我物資を排して酬い来るや、足下、決然英官憲を督励して各地を豫戒し、英人亦前日の恩に対して勉励甚だ努め、未だ管下同胞の遭難を聞かず、比較的静穏にして今に至る、……更に船医・郵便・ゴム輸出の諸問題に功績の見るべきもの少なからず、歴代の領事に比して蓋し出色なるを覚ゆ。

事実、1915年８月の段階においても、イギリス極東海軍司令官ジェーラムの要請に応じ、財部第三艦隊司令官は軍艦明石のほか、秋津洲を蘭領インド方面に出動させ、ドイツによるインド独立運動にたいする武器の支援を警戒させていたのである[16]。インド独立運動をめぐる日英関係、そして、アジアにおいてイギリスが日本の海軍に依存するという枠組みには大きな変化はなかった。

1915年９月から11月にかけて、シンガポール日本人社会は、日本人会の結成と大正天皇即位「御大典奉祝」の準備に忙しくなる。日本人会は９月12日に成立した。ところが、10月31日、邦人遊郭で「警官暴行事件」が起こる。11月２日と３日の『南洋日日新聞』によると、「陛下の軍人」「国家の干城たる軍人」が華人・マレー人巡査の暴行を受け、数時間警察署の留置場に拘束されたことに怒りを爆発させた。２日付の同紙は、「31日馬来街争闘事件の非は挙げて英国官憲にあり」、「此の際、在留邦人の全部は一斉に起ち、鼓を鳴らして彼等の非を責むるに努力せよ。先に、船渠掛橋は帝国水兵の多数を殺傷し、更に今次又もこの傷害を与う。傲慢無礼なる官憲にして更に反省するなくんば、帝国軍艦たる者速やかにともずるを解いて、祖国に帰れ、而して天皇陛下に委曲伏奏せよ」と激しい調子の檄文を一面トップに掲げた。

イギリスに対するこの威信の誇示が、華人・マレー人にたいする「劣等」視と共鳴し合っていることにまず留意しておきたい。加えて、日本社会内部についても、民間人に対する危害と軍人にたいするそれとを区別していた。11月３日の同紙の論説、「言論」は、佃的外の名において、「今次の事、小に似て小事に非ず。普通人ならば殴らるとも、斬らるるとも、はたまた、たとえ殺さるとも、事情によりては敢えて隠忍もすべし、これが軍人なるに於いては土人輩の一指を触るるさえも許す能わず、況して警吏の多数が衆を恃みて暴力を逞うし、之を傷害し、更に監禁せんこと吾人は断乎として其の非を詰り、又その罪を問うべき也」と糾弾している。しかしながら、佃は、「熱血の男児」には街頭で怒号せよと呼びかけ、「若し吾人の行動星坡の治安を乱すとあらば、敢えて追放命令を甘受せん」と訴えたのにたいし、領事、日本人会にたいしては、「ここに一言注意すべき事は、英国の主権下に在留する吾人は、たとえ領事たりとも、日本人会たりとも其の司法権、はたまた警察権に容喙すべきに非ず。只適法の行動を執りて彼等の反省を促せば足る」として無法な行動を戒めていた。事件を「売られたる喧嘩」として、「英国こそ恩義を帝国に負う所多けれ、帝国は迷惑はあれどもごう末の利益なし」と明言して日英同盟の破棄すら視野に入れた「暴行問題と帝国」と題する記事、「日本人会もこういう時、大活躍せねば何時活動するか。日本人会は飾り物ではない」と檄を飛ばしたジョホールの南亜公司重役、保華津孝治の発言に比べて多少とも抑制をきかせている。しかし、これまで「グダン」の人たちの動きを追いつつも、「下街」の日本人の生活観にたいする共感を隠さなかった『南洋日日新聞』の立場からすれば、「熱血の男児」にのみ追放覚悟の行動を求めるのは、やや座り心地の悪い意見でもある。そこには、日本人会の理事会に「発行人」の古藤秀三を出している同紙の立場もあったものと思われる。その意味においては、日本人会は、シンガポール日本人社会の「統一」の方向への重要な一歩であった。そして、日頃の報道の論調と形式を大きくはみ出して、憤怒の思いをぶちまけた同紙の姿勢は、どの程度日本人社会に共感を呼んでいたか、跳ね上がりの意見ではなかったかという疑問も残るが、南亜公司は日本人会に理事を出している会社の一つでもある。こうした姿勢の背景に、第一次世界大戦期シンガポールにおける日本の経済活動の拡大に支えられ、その上に、イギリスの要請に応え

てインド兵の反乱の鎮圧に義勇兵と第三艦隊の陸戦隊を送った、もはや「アジアの小国」ではない日本の「自信」と「威信」があったことはたしかである。

1915年11月10日に日本国内の催しに合わせて行われた「星坡の御大典奉祝」はそのような流れ、「大正ナショナリズム」の結集の場となった。日頃は摩擦の多い日本人社会について語る『南洋日日新聞』も、「いとも目出度き此日は同胞和気藹々の裡に（奉祝を）終れり」と評している。注目されるのは、この日のためにイギリス側が用意した協力であり、義勇隊結成以来、何かにつけイギリスの姿勢を批判してきた同紙も感謝の意を表わさざるをえなかった。「御真影拝賀」の行われた日本領事館に通じる道路では、「英人警官は数名の馬来巡査を督しつつ、邦人通路の保安に任ぜり、英国官憲の心遣り有難く感ぜられぬ」と述べており、一週間前のあの激怒はどこかに消えていた[17]。この後開かれた奉祝園遊会では、シュロップシャイアー軽歩兵連隊の軍楽隊が日本国家を吹奏した。同連隊は、インド兵の反乱直後、急遽ラングーンからシンガポールに移動して来ていたのである。ヤング総督は、来賓を代表しての演説のなかで、2575年に及ぶ皇統ならびに明治天皇の長期にわたる治世下での日本の進歩と繁栄を称え、1907年の日仏・日露の協商に先立つ５年前に日英同盟を結んでいることを誇りに思うと述べた。さらに、この大戦において英帝国のいずれの地域よりも海峡植民地が同盟の恩恵を直接に感じているとして、インド兵の反乱鎮圧に際しての優れた功績の故に土屋少将、音羽・対馬の将兵、日本領事、日本の民間人に２月末に感謝の意を表わしたことに触れている[18]。

大正天皇即位を祝う11月10日は、シンガポールにおける「統一」した日本人社会が、イギリス植民地下シンガポールでマレー人、華人、インド人とともに生活する場にとどまらず、「東洋の覇者」日本の活動の舞台であることを誇示する機会となった。他方、ヤング総督の発言は、第三艦隊と義勇隊の役割をイギリス側から日本人社会に印象づけ、日英間の様々な摩擦・対立にもかかわらず、イギリスがアジアのこの地域で日本の軍事力に依存することの現実的な利益を重視したことを示している。このような枠組みのなかでは、インドの独立への意志とその運動は、鎮圧の対象であることが改めて両政府によって確認されたのである。

３．義勇隊結成と日本人社会の反応

(1)　「グダン」と「下街」

シンガポールにおける日本人社会、とくに定住者の生活するミドル・ロードを中心とする日本人街が反乱直後どのような反応を示したかについては、藤井領事の日本外務省宛の電文からはわからない。

２月19日付の『南洋日日新聞』は、「グダン」の状態について、「欧州人経営の各会社は店員の多くが義勇兵に招集されし為、総て休業し居れリ。然れども、邦人経営の乙宗商店、台湾銀行、三井物産、南満州汽船、深川汽船等の支店、出張所は依然として事務を取りつつあり」として、少なくとも形の上では仕事が続いていることを伝え、「在留邦人にして最も警戒すべき点は叛乱印度兵の危難にあらずして、目下の所寧ろ此機を利用して強窃盗をなす各種民族の浮浪人にありといえば、各自其点に注意すべき事肝要なり」と警告していた。すでに18日の段階で、市の中心部が多少とも落ち着きを取り戻し始めたことが知られる。また、「帝国領事藤井實氏はグレーンヒル路荒城少佐（駐在武官）宅に、又三井物産は海岸通星洲楼に、郵船会社出張員大谷登氏は碩田館に各避難し居れリ」と記して、義勇隊の結成について議論を交わした日本人有志の避難先を発表している。

すでに触れたように、義勇兵の解散式は２月21日に行なわれ、幹部を除く義勇兵にたいしては在留邦人有志の醵金により取り敢えず１日１ドルの割合で慰労金が給付された[19]。25日には、第三艦隊陸戦隊の任務を解く閲兵式がクリケット・グラウンドで行なわれた。注目されるのは、27日にヤング総督が陸戦隊及び義勇隊に感謝の意を表わすために開いた晩餐会に、領事夫妻、土屋司令官、和田義勇隊長、鈴木予備海軍軍医総監のほか、大村三井支店長、滝田台湾銀行支店長、大谷日本郵船出張員を招待していたことである[20]。ここには、「グダン」を代表する人物が名を連ねている。他方、兵籍にある者もいたとはいえ、義勇隊員の多くは「所謂内地の南洋熱に駆られて当地方に渡来したる者、又は豪州ブルーム地方より追われ来たれる真珠業者等にして差当り衣食に窮しおりし者」[21] であったために、彼らに冷やかな眼を注ぐ日本人もあった。

『南洋日日新聞』の投書欄「ポスト」は、ときに「花街」の状景も引き合いに

出しながら、読者に短文による日本人社会批判の場を提供していた。投書には、義勇隊員の行動を茶化すものもあった。次の二つの寸評がその例である。

「義勇兵にも中々度胸のよいのが居た。過日セントラル・ポリス・ステーションに滞在中、平中将維盛以上のが居った。如何に修養が不足だといっても、国異（くにちがい）の手前もある。少しは負けぬ気を出して、例え虚勢でもよいから張ってもらいたかった。(磯千鳥)」同紙２月23日付より。

「義勇兵は乞食のごとして、銭ばやらんばってん。よろこぶことしてやったら、どげんあるとへー。おんたちやアー新聞ではじばさらした金ばもらいます……（夜の女神)」同紙３月10日付より。

しかし、義勇兵あるいは「下街」の立場からの「グダン」の日本人への批判と反論の投書は義勇隊結成直後の２月19日の同紙から始まっていた。以下はその数例である。

「吾には、あの浮世の馬鹿よ烏合よと罵しる奴の気が知れぬなり。(解散後の義勇兵)」同紙２月28日付より。

「日本の義勇兵には銃を投げて逃げる様な者は、１人も半人もなく、妬み根性で下らぬ悪評は日本人の口からせぬがよかろう。(大和民族)」同上。

「義勇兵立替金寄付者名簿中に何会社、或いは何商会誰々とある。勿論、其の本店を代表しての行為かも知れぬが、いわばマカンガジじゃないか[22]。幾らか給料や交際費を取って居ても、それは其の店を代表しての話だろう。然らば、姓名が出したけりゃ、其の職責を記すがよい。中には、会社の名前も出さずに個人だけのもある様だ。おら、氷売りしてても、人様の使用人じゃござんせんで。(独立独行)」同紙３月10日付より。

とくに、義勇兵を怒らせたのは、反乱直後のシンガポール日本人社会を推測した『時事新報』の記事であった[23]。そのなかで、明治41年（1908）から６年間三井物産シンガポール支店に勤務していた観世元継は、「当社へは同地の支店から、

17日午後１時半の発電で、店員一同無事、平常通り執務中なりと始めて知らせて来たのみであるが、此の位の騒ぎなら一通りのことは打電して来なければならぬ筈である。或いは、近来官憲の検閲が厳しいから押えられたのではあるまいか。然うすると騒ぎは案外に大きいのかも知れぬ」と述べた後で、邦人義勇兵の結成とのかかわりで日本人社会について以下のような感想を吐露した。

> 元来、新嘉坡は旅人の多い所で世界各国の種々雑多な人種が入り込んで居るから斯様な時には騒ぎであろう。日本人は約３千人ばかり行って居るが、其の内７百から８百人位の醜業婦が居る。日本人の会社としては、三井（うちい）の支店と台湾銀行のみで、其の他は、雑貨を営んで居る者は上の部で、苦力の小頭になったり、女郎屋街の飲食店などの皿洗いなどをして居る有為な青年が沢山居る。今度の義勇兵になったという連中などが多分此の手合であろう。

『南洋日日新聞』は、のちにこれを読んで投書した前義勇兵の文章の要点を紹介した[24]。それは、「余りに軽薄無礼な言條ならずや。之を鵜呑に紹介する時事新報の記者も余程頓馬な野郎に相違なけん」として、もし大新聞の報道として伝われば、「吾等の父兄は此の記事を読みて如何なる苦痛を感ずべきか、実に断腹の感に打たれまをし候」という内容であった。邦人義勇隊は、シンガポール在留日本人の「総意」として誕生し、その反乱鎮圧への貢献は日本人社会の「統一」の方向への力強い一歩となる筈であった。事実、そういう方向への一歩となったことはたしかである。「グダン」も、「下街」もそれぞれの形で義勇隊の活動を支援し、その延長上で、1915年９月12日に日本人会は成立したのである。日本人会理事の１人、日新ゴムの支配人和田義正は義勇隊長であり、もう１人、川上精一も後備陸軍歩兵中尉として隊の中枢部にあって活動していた。しかし、この義勇隊員の怒りは、日本人社会内部の摩擦が義勇隊の結成・支援を通じて逆に増幅する側面も存在したことを示している。

『南洋日日新聞』のその後の論調が執拗なほど日本人社会の「統一」、そして、そのための日本領事、そして日本人会の努力を促しているのはこうした理由からであった。７月９日付同紙に載った藤井領事宛の佃的外の文章についてはすでに

触れたが、「外交の機微」は会得していても「内地人に暗い」領事にたいし、「道聴に曰く下街、其の意味を解せず其の創作者を知らずと雖も、家宅を星坡の高台に構う徒輩の考案、細民及び賤業者を指し併せて侮蔑の称ならん」と「下街」という語の由来から説いて、領事が「比較的上に親しみて下を疎んずるは事実なり」と断言している。その上で、佃は領事の新公館が「下街」より非常に遠いことに不満を述べ、「在留邦人大多数の実情を知るに努めよ」と訴えていた。そして、来るべき大典奉祝については、「階級によって奉祝を加減すべきに非ず、而して其の多数は下級労働者なるを忘るなかれ」と説き、日本人会については、反目の絶えない会ならば無い方が良いと結んでいる。

「平等主義」的見解は、とくに大典奉祝のあり方について強調された。7月17日付同紙の論説において、佃は「一般的に普及的に貴賤貧富を別たず、奉祝の誠を天に捧ぐに止めなば、何ぞ業々しき協議も準備も要せざるにあらずや」と問い、「階級的団体にして、身分を問い、職業を別つ」日本人会が奉祝するのでなく、「徹頭徹尾日本人の挙行なり」としている[25]。「下街」に根を置いたこの「平等主義」は、日本人社会、シンガポール社会、そして世界を、対等な人々の集まりと捉えていたわけではないが、奉祝の一点における在留邦人の「平等」を謳っていた。奉祝の儀式には、日本人会にも達成できない日本人社会の「統一」が期待されていたのである。現実の儀式は佃の思うようには進まず、シンガポール日本人社会内部の反目はその後も続いたが、大典奉祝が「至尊の下での平等」に基づく「統一」への方向で果たした役割はきわめて大きかったといえよう。

(2) インド兵の反乱と「花街」

1916年8月15日、帰国した藤井領事（領事着任1913年8月4日）は、過去2年間のジョホール・シンガポール日本人社会とその活動の著しい発展・変化として、ジョホールにおけるゴム園の拡大と、シンガポールにおける中流階級の堅実な成長と「醜業婦」の減少を挙げ、数年前、在留邦人の半数以上を占めた婦人は、約3千人中7百から8百人の割合になったことを「好傾向」と語っている[26]。また、『南洋日日新聞』は、発刊一周年記念号の論説を、「花柳界戦慄時代」と題して、「往年の色街に人道守護神の怪影現われ、悪鬼を悉く引掴み去った」、すなわち嬪

夫の追放のときの女性たちの「戦慄」から始めている[27]。

このような状況のなかで、シンガポールのマレー・ストリート、マラーバール・ストリート、ハイラム・ストリートを中心に存在した娼館とそこに生活するからゆきさんも、インド兵の反乱の影響から逃れられなかった。２月18日付『南洋日日新聞』は、「16日夜の邦人花街（ステレツと言われていた。ストリートの訛り）は客足一つ無く、各戸、雨戸を閉ざし、軒燈を消して用心に用心を重ねゐしが、午後11時頃其の筋よりの警告を受け、町内の各商店、料理店、氷屋其の他より約30名の壮中年者を出して、徹夜郭中における盗賊の警備に当てたりき」と記している。インド兵の反乱そのものよりは、混乱を利用しての「盗賊」に警戒感を募らせていたといえる。翌日の同紙も、「16日夜は突然の報を得たる為、多少狼狽気味にて各青楼悉く軒燈を消し、表を閉ざせしも、17日夜は常の如し。俄に編成したる同町付近の商人約30余人よりなる警戒団は16日夜は馬来街25番、17日は同20番の表下を本部として、夜12時より翌朝まで４人１組30分交代にて町内を巡歴し、盗難に備えつつあり」と伝え、郭内の夜警が組織的に行なわれていた様子がうかがえる。19日の新聞には、マレー・ストリートの芸妓種吉ほかの発起で郭内および周辺の有志を募って、「服役中の日本人義勇兵のせめてもの心を慰め」るため、南洋日日新聞社を通じて慰問袋が和田義勇隊長のもとに送り届けられたことを報じている。「花街」に賑やかさが戻るのは、義勇兵の解隊式が行なわれた21日の夜からであった[28]。

> 暴動事件勃発以来いやに緊張した邦人花街も日本人義勇兵団の解隊と共に、其の景気も幾分回復されたらしく、21日の夜など日曜という関係もあったろうが、なかなかに賑やかであった。……
>
> 相変わらず、郭内棒組の夜警は男女入り混じり、２時頃から棒引き歩く音が盛んである。

このように、からゆきさんは、様々の批判にもかかわらず、シンガポール日本人社会の不可分の一部であった。しかし、彼らの社会、そして義勇隊の活動への貢献は、有力者と異なりその名を刻むことなく進められ、また、名もない貢献を

強いられたのである。まだ義勇隊が活動していた２月20日の『南洋日日新聞』に載った以下の投書はそのことを象徴的に表わしている。

> 日本人の義勇兵に日用品ば買うてやりやんひょというて来られたけん、おんども50仙がと寄付ばしたとです。たいそうだばってん。昨日の新聞ば見ると、あげん世話人の名前ばかり出ておっとでしょがい。おんどま、おかしうでたまらなかったばい。(某みせす)

日本人会成立の過程で「婦人会員」についてどのような議論がおこなわれたのかはわからない。しかし、「御大典奉祝」については、「花街」もひとしく参加する気持に変わりなかった。大典前夜の「花街」について、『南洋日日新聞』は、「淋しいこと火の消えた如し。１月も２月も前から御大典の芝居に夢中になっていた。花街は御大典の前日からもう尻が落ちつかぬという浮つき様、当日になると、何処のご令嬢か令夫人かと見違う様な盛装で、タウンホール（日本人会主催祝賀行事の会場）指して、えー、チャーラカス（ちゃらつかす？）。だから昨夜の花街の淋しいこと。揃いの提灯を吊るしてはいるが、肝腎の娘さんがいないので、素見して歩くものも少ない」と描写している[29]。義勇隊支援への「名もない」貢献を基礎に、大典奉祝への「平等」の立場での参加、少なくともその意識は、「下街」の一角を形成する「花街」にも貫かれていたのである。

４．ドイツ人捕虜収容所の日本人理髪師

インド兵の反乱に際して、80－100人の兵士が、シンガポール在住のドイツ人および撃破された巡洋艦エムデンの乗組員からなる約300人の捕虜を入れていたタングリンの収容所を襲い、ドイツ人に反乱の指導を求め、拒否されたことが知られている[30]。反乱兵にとっては、大きな誤算であったが、その夜、ドイツ人17名が警備が手薄の収容所を脱走し、そのうちの４名は再逮捕されている。

恩田と今村は、収容所開設の当初から理髪師としてここで働いており、２人が藤井領事にインド人反乱兵が収容所を襲ってきたときの状況を語っているほか、

恩田はイギリス側の査問会議でも証言している[31]。証言は英語で記録されているが、日本語で話した可能性がある。氏名は「タオンダ」と書かれているが、「タ」は名前のイニシアルかもしれない。このほか、『南洋日日新聞』は、２月19日の紙面で恩田（本多は誤記であろう）と今村がビクトリア・ストリートの理髪店で話したことを伝えている。おそらく、これが２人の目撃談が記録された最初である[32]。

タンギ（グ）リンバラックの印度兵が独逸捕虜収容所護衛兵を襲撃したのは、15日の午後４時少々前であった。折りしも、散歩時間に相当するところから、護衛兵員等は各自読書散歩等に耽っていて、隊長を始めベットに休息中を銃殺されたので、殊に余りの突然な襲撃であった所為か、逃げ損なった２名の英兵の如きは、収容所のドイツ人のベットの下に隠れてる所を捕虜の為あべこべに武装を解かれたそうだ。其の内に、インド兵の幹部と捕虜独逸人との間に何事か交渉まとまり、屈強の紳士風の男数名は武装し、エムデン号の〇〇長とかは普通の洋服にて英語の流暢な支那人のボーイ１人を伴い、何処ともなく逃走したそうだ。このほか、武装した者30余人あったが、急報に接して馳せつけた英兵を見て、慌てて武装を解き武器や被服などはベットの下や部屋の隅へ隠したそうだが、彼らが斯かる急場に処する動作の機敏なるには驚嘆せざるを得なかったそうだとは、昨年から独逸人収容所に雇われていた本多、今村両理髪屋の談としてビクトリア街55号の床屋から聞くがまま。

恩田と今村が語った理髪師の仲間は、ビクトリア・ストリートのロンドン理髪館あるいはミカド理髪店かもしれない[33]。恩田は、反乱兵が収容所に襲撃しながら入って来たとき、何が起こっているか知るために高い場所に移動したと査問会議の証言では述べている。ドイツ人捕虜の只中の高い場所としているので、60人ほどのドイツ人が休憩をとっていたレクリエーション・グラウンドであろう。今村がどこにいたかは、現在得られる資料ではわからない。

収容所の警備に当っていた４人の将校（３人のイギリス人、１人のマレー人）、７人のイギリス人と２人のマレー人の下士官・兵士、散弾によって１人のドイツ人を射殺して収容所内に入った反乱インド兵が[34]、ドイツ人捕虜に武器を手渡し、

反乱の指導を求めてから、これを拒否され、改めて武器を持って戻って来ると言って去るまでの時間は息のつまるような場面の連続であった。突然の凄惨な事態を見たドイツ人捕虜のあいだでは何をなすべきかをめぐって意見が分かれた。反乱に加わるべきだと興奮する捕虜もいた。かねて、収容所の警備を担当していた第五軽歩兵連隊のインド兵と会話を重ね、自分達の脱走のために反乱を働きかけていたラウテルバッハは、イギリス軍の反撃の前に反乱の成功の見込みはないとして捕虜の気分を静める一方、反乱兵にたいしては、海の兵士は陸の戦いでは君たちより劣ると言って、手渡された武器を返している。恩田と今村によって冷静に行動していたと観察された数人は、この日この時でないにしても反乱のありうることを視野のなかに入れていたラウテルバッハとその周辺の捕虜であったと思われる。しかし、反乱の報を聞き、掛けつけた民間人医師のピーター・フォーリーは、その後の証言で、捕虜の多数は恐怖でおびえ、「我々はどうなるのか」「誰も我々を見る者がいない」「我々は殺される」などと話しかけてきたと述べている。彼らは、収容所に入ってきたイギリス人の安全を気遣い、負傷者の発見・看護をも手伝ったという[35]。極限状態の下で、敵対関係を超えた協力が行なわれたのである。

他方、反乱の主要な原因の一つとして、ドイツ人捕虜による煽動に乗せられて、インド兵が反乱に及んだことがよく挙げられる。しかし、ここではインド兵は乗せられる存在としてしか見られていない。実際には、警備するインド兵は、「敵」であるドイツ人捕虜と話を交わすうちに、作られた「敵」と戦うことの無意味さを悟り、それが戦場に向かうことを拒絶する姿勢、そして、「自由」への意志に傾いていったのである。

恩田と今村も、ドイツ人捕虜収容所で働きながら、イギリス人ともドイツ人とも日常的に接触していた。しかし、３ヶ所での彼らの発言のなかに、冷静・機敏なドイツ人捕虜の描写はあっても、理髪師としての日常生活から出た感想、そして、なによりもインド兵の反乱をどのように見ていたか、反乱が彼ら自身にどのような衝撃を与えたかは語られていない。反乱の「首謀者」をあぶり出す査問会議はそれを表現する場ではなく、藤井領事の聞き取りも第一次世界大戦と日英同盟という基本的枠組みのなかでのドイツ人の行動の跡付けに留まっている。

その意味では、恩田が「下街」の中心から少し離れたタンジョン・パガルに住

んでいたとはいえ、理髪師仲間の話は自由な発想の「床屋政談」の場になっていたかもしれない。しかし、ビクトリア・ストリートは義勇隊への慰問袋の贈呈など「下街」発の「ナショナリズム」の磁場のなかにあった。検閲下の新聞という事情はもちろん存在したが、恩田と今村の素直な印象が記録されなかったのはこうした理由からでもあろう。実際、２月20日の『南洋日日新聞』は、慰問袋にたいする義勇隊の謝意を伝えた後で、次のように述べていた[36]。

> 猶ほ一昨日バンダ、スプリン、サイゴの三街より、邦人義勇兵および陸戦隊宛に領事館の手を経て慰問袋を送りたる由。その他、昨日当地理髪同志会よりは煙草を同隊に寄付すべく本社に依頼ありたり。この外、郭内より更に左の諸氏より慰問袋の贈与ありたり。

郭内の「諸氏」の多くは、例によって名前を付さずストリート名と番地だけが表示されている。そして、理髪師の集まりは第三艦隊陸戦隊の支援に積極的に加わっていた。日英同盟の基礎の上に、陸戦隊と邦人義勇隊がドイツとの関わりも疑われるインド兵の反乱を鎮圧するという枠組みの認識は、「グダン」の人たちの視線を強く意識しながら、「下街」に深く根を下ろしていたのである。その点からも、ドイツ人捕虜収容所で働いていた恩田と今村が反乱の前夜に、そして反乱の現場で何を考えていたか知ることは難しい。

むすび

1915年11月27日、東京の上野精養軒で大正天皇の即位を祝うインド人の集会が開かれた。司会を務めたのは、「インド・ナショナリズム」の代表的指導者の１人で、アメリカで亡命生活を送り、1915年７月から日本に滞在していたラーラー・ラージパト・ラーイであった。ラーイは天皇の下で長い間独立を維持してきた唯一の東洋の国家日本を称えた[37]。しかし、その翌日、２人のインド人革命家ラーシュ・ビハーリー・ボース（当時は「タクール」の名で呼ばれていた）とH. L. グプタ（「ガプタ」）への国外退去命令が出された[38]。シンガポールにおけるイン

ド兵の反乱鎮圧のための第三艦隊の派遣と邦人義勇隊の結成が、日本の言論界、そして日本に滞在するインド人民族主義者、革命家のあいだで批判の俎上にのぼるのはこうした状況のもとにおいてである。

『南洋日日新聞』は、この退去命令が出される１週間ほど前の論説で、インド人革命家を保護する動きが「一部の人士」のあいだにあることを論評抜きで伝えていた[39]。

> 一部の人士間では、日本政府として英国への気兼は然る事乍ら、万一の場合国事犯人を英政府に引渡す様な事があっては日本の国辱なりと称し、密に亡命客等の身の安全を企画してやって居る向もある。尚、タクール氏は、印度の革命は決して独人の使嗾(しそう)に始まったものでは無いと断言して居る。

しかし、２人に対する国外退去命令が出された後の同紙の論調は、「窮鳥の懐に入る、猟師も之を打たずという。況して大国の襟度の於いてをや」として、両人がドイツと密かに謀略を企んでいないのであれば、彼らを庇護するのは日本の自由であり、「東方義侠国」の人情の発露であるが、「独探」、つまりドイツとの共謀の証拠があれば、追放措置はむしろ軽いくらいであると説いている。的外が筆を執ったこの論説は、日本政府が「被追放者の罪状」を何故公表しないのかと問い、そのことが日本国民、中国の志士、印度の民衆、世界の心ある者の対日不信を招くとして、政府への支持に条件も付している。自身の見解を守るためにあらゆる布石を据えてはいたが、その核心には次のような主張があった[40]。

> 若し然らずして独探なるも尚且之を保護すべしといはば、非理も甚し、何となれば今や日英は協力して独逸と戦いつつあり、英国の興廃は我邦に甚大の影響を与う。況して印度の安危は直ちに我に関係あり。タクール、ガプタの２者仮令印度人なりと雖、敵人と通謀して吾人の利益を脅すに於いては、最早我々が保護すべき政治犯人に非ずして、之を攻撃すべき敵人たらずんばあらず。彼等は既に政治犯人の範囲を脱却して敵国に通じたるなり。国土より追放するは寧ろ刑軽きに失す。一片の義侠心に駆られて一国の大事を過るべきに非ず。

第三艦隊と邦人義勇隊にたいするシンガポール日本人社会の支援の経験に支えられて、日本の「大国」化への道筋を用意する場としての日英同盟の有効性への確信は、佃にあっては、そして『南洋日日新聞』の論陣のあいだでは揺るがなかった。その確信は、シンガポール日本人社会内部の亀裂を超えて第三艦隊と義勇隊にたいする「統一」した支援を目指したが故に、また、インド兵の反乱鎮圧という日英同盟の最前線の「成果」の故に、日本のジャーナリズムの動向に左右されることがなかったのである。

日本の内部では、「ご大典奉祝」への在留インド人の参加も、２人のインド人革命家にたいする国外退去命令の発動を防ぐことができなかったが、その後に、彼らを官憲の手から救出する運動が起こった。他方、シンガポールにおいては、日英間にどのような摩擦があったにせよ、奉祝の場でイギリスの「好意」を引き出した日本人の「統一」の達成が、何故に戦争でイギリスの指示する敵と戦わなければならないのかというシンガポールに駐屯する第五軽歩兵連隊のインド人兵士の叫びに耳を傾けることを難しくした。

ところで、インド兵の反乱は、シンガポールにおけるイギリス支配が終ったという「噂」を通して苦境にあったクランタン農民の反乱を励ました。そこでは、世界戦争とイギリスの勝利のために自分の生命を犠牲にすることを拒否したインド兵と、戦争による世界経済の変転に翻弄されることを望まないクランタンの農民が歴史の底流において深く結ばれていた。それ故に、兵士たちのメッセージは検閲の網をくぐり抜けて伝わったのである。

『南洋日日新聞』は、広告を含めて、第一次世界大戦期のシンガポール在留邦人の生活、とくに、「下街」に生きる人たちの生活観を記録した貴重な資料である。独特の個性をもつ同紙の論調が当時のシンガポール日本人社会の考え方を代表していたかどうかについては議論の余地があろう。1915年にシンガポールで発現し、草の根にも支えられた「大正ナショナリズム」が当時の日本の全景を象徴するものであったか、あるいは日英同盟の最前線での特殊な姿であったかについても改めて分析を必要とするだろう。しかし、戒厳令下にあったとはいえ、インド兵の反乱直後の『南洋日日新聞』の論調においては、日英同盟は、ときに大きく揺さぶられることがあっても、当然の前提とされていた。そして、同紙は反乱

の原因・経過についてはイギリス側の発表する公報に依拠し続けた。反乱を知ってジャングルに逃れた兵士を含め、インド人兵士の切実な訴えは公報のなかに、また、『南洋日日新聞』の記事のなかに見出すことはできない。

注

1 Sho Kuwajima, *The Mutiny in Singapore-War, Anti-War and India's War for Independence*, New Delhi, 2006.

2 Sho Kuwajima, "Indian Mutiny in Singapore, 1915: People who observed the Scene and People who heard the News", *New Zealand Journal of Asian Studies*, 11, 1 (June 2009) に掲載予定。この集会は、東南アジア史家であり、シンガポールの反乱についての論文もあるニコラス・ターリング教授の75才の誕生日のお祝いを兼ねて開催された。

3 『南洋日日新聞』については、早稲田大学中央図書館所蔵のマイクロフィルム（British Library のコレクション）を利用することができた。また、史料検索について、1994－96年に大阪外国語大学図書館の同僚であった森垣啓土さん、図書館への紹介・閲覧申込については、海老名市立図書館の井上篤館長と清水妙子さんのお世話になった。なお、同紙からの引用については、原文をできるだけ崩さないよう心がけ、句読点を加え、現在はほとんど眼にすることのない漢字のいくつかと仮名使いをわかりやすくすることにとどめた。

4 *Kok Min Jit Poh*, 23 February 1915 の記事も、反乱後の華人社会の庶民の反応を論評した数少ない文章の一つである（Kuwajima, *The Mutiny in Singapore*, pp. 102-3 参照）。

5 C. M. Turnbull, *Dateline Singapore-150 Years of The Straits Times*, Singapore, 1995, p. 76.

6 桑島昭「世界大戦の性格と「地域」の視点－シンガポールにおけるインド兵の反乱（1915）」『えくすおりえんて』10号　2004年　30－34ページ。

7 同上論文、30－31ページ、また、Kuwajima, *The Mutiny in Singapore*, pp. 95-97 を参照。

8 「義勇兵の陣中裏面観」『南洋日日新聞』大正４年（1915）２月24日。

9 「血を吸う馬来巡査－邦人氷屋の慷慨談」同紙1915年３月10日。

10 シンガポール日本人会『戦前シンガポールの日本人社会－写真と記録』シンガポール 1998年　42ページ。

11 田村叔七「義勇兵の慰労に就て」『南洋日日新聞』1915年３月６日。

12 「百姓一揆略平定す－先づは目出たい事なり」（同紙1915年５月６日）、「半島の百姓一揆詳報－その原因と状況」（５月８日）、「農民騒擾平定難」（５月９日）、「半島の農民騒擾平定か？」（５月12日）、「農民暴動愈々平定－暴徒は英軍の到着を見て四散」（５月13日）、「半島農民暴動尚やまず－暴徒の夜襲、索敵行動開始」（５月28日）、「半島農民暴動顛末（上）－28日政庁発表」（５月30日）、「同（中）」（６月１日）、「同（下）」（６月２日）、「農民暴動地より－５月18日　コタバルにて　○△生」（６月３日）、「暴動農民首魁の晒首－英人も中々残忍なり」（６月６日）。

13 Ban Kah Choon, *Absent History-The Untold Story of Special Branch Operations in Singapore 1915-1942;* Singapore, 2001, pp. 48-49. また、Kuwajima, *The Mutiny in Singapore*, pp. 144-47を参照。

14 "Kelantan Trouble", *The Straits Times*, 7 May 1915.

15 佃的外「藤井領事に与ふ」『南洋日日新聞』1915年７月９日。

16 在新嘉坡藤井領事より大熊兼任外務大臣宛1915年８月15日および８月21日付電報　外務省『日本外交文書』大正４年第三冊上　1968年　104－６ページ。

17 「星坡の御大典奉祝」『南洋日日新聞』1915年11月11日。「御大典奉祝」および11月10日午後３時30分に当時の日本の植民地を含む全国で天皇に向かって万歳が三唱されたことについては、原武史『大正天皇』岩波書店　2000年　206－８ページ参照。シンガポールにおいても、同時刻（シンガポール時間午後２時30分）に合わせ、藤井領事の主唱によって万歳三唱が行なわれた。

18 "Japanese Coronation-The Felicitations of the Straits Settlements", *The Straits Times*, 11 November 1915.

19 藤井實「在新嘉坡印度兵暴動事件報告」外務省『日本外交文書』大正４年第三冊下　1969年　1200ページ。

20 同書　1204ページ。

21 同書　1200ページ。

22 マカンガジの意味不明。

23 「詳電が来ぬのは叛乱が甚(ひど)いのかと三井の観世元継氏は語る」『時事新報』1915年２月19日。

24 「之ぢや酷い」『南洋日日新聞』1915年３月10日。

25 「言論：速に実を挙げよ－日本人会設立委員会に望む」同紙1915年７月17日。

26 「新嘉坡の日本人」『東京朝日新聞』1916年８月16日。

27 「過去一週年」『南洋日日新聞』1915年５月１日。

28 「景気漸く回復」同紙　1915年２月23日。

29 「昨夜の花街」同紙　1915年11月11日。

30 桑島昭「第一次世界大戦とアジアーシンガポールにおけるインド兵の反乱（1915)」『大阪外国語大学学報』69号　1985年　30ページ。また、Kuwajima, *The Mutiny in Singapore*, pp. 71-79, R. W. E. Harper and Harry Miller, *Singapore Mutiny*, Singapore, 1985, pp. 55-71, および T. R. Sareen (ed.), *Secret Documents on Singapore Mutiny 1915*, New Delhi, 1995, I, pp. 190-250を参照。

31 Ibid., pp. 231-2.

32 「横着なる独逸捕虜－印度兵襲撃当時の実見談」『南洋日日新聞』1915年２月19日。

33 シンガポール日本人会前掲書　31ページ。

34 Harper and Miller, op. cit., p. 55.

35 Sareen, op. cit., p. 239.

36 「慰問袋は大受け」『南洋日日新聞』1915年２月20日。バンダ・ストリート、スプリング・ストリート、サゴ・ストリートは、現在、シンガポールの「チャイナ・タウン」の中心部にあり、サウス・ブリッジ・ロードとともに仏教寺院を囲んでいる。

37 "Tokyo Indians hold Coronation Banquet-India's Admiration for Japan's Achievements-Ancient Friendship recalled", *The Japan Advertiser*, 28 November 1915. なお、日本滞在中のラーイについては、上田辰之助「パンジャーブの獅子」『上田辰之助著作集　5　経済人の西・東』みすず書房　1988年　483－503ページ参照。この原文が収められたのは『経済人・職分人』理想社　1942年であるが、この思い出の末尾に「新嘉坡陥落」の翌日に「印度人の印度」のための「愛国的努力」にたいする「援助」を議会で約束した東条首相の声明が加えられている。1915年に日本に滞在していたインドの民族主義者、革命家たちは、ラーイを始めとして、インド人革命家退去命令とシンガポールにおけるインド兵の反乱の鎮圧とを同一線上で批判したが、反乱の鎮圧については、第一次世界大戦終了後の日本でほとんど顧みられることなく、後景に追いやられた。日本近代史のそのような側面が、「シンガポール陥落」後の日本によるインド独立「援助」の内容、そして、1942－45年のシンガポールにおける日本軍政の性格に影を落としている。

38 「印度人に退去命令－在京の革命党員二名」『東京朝日新聞』1915年11月29日。

39 「インドと革命党－日本に於ける亡命客」『南洋日日新聞』1915年11月20日。

40 「言論：印度亡命客追放問題」同紙1916年１月６日。

Indian Mutiny in Singapore (1915):
In the eyes of *The Nanyo Nichi-nichi Shimbun*

KUWAJIMA Sho*

The Nanyo Nichi-nichi Shimbun started its publication as the daily Japanese newspaper in Singapore from 1 April 1914. The Mutiny of the Fifth Light Infantry in Singapore occurred in the afternoon of 15 February 1915, and the Martial Law was promulgated on the same day. This paper, which published the 218th issue on 14 February, brought out the next issue on 18 February. The 14th was Sunday, and the 15th and the 16th were Chinese New Year Holidays.

1

The first issue of the paper after the occurrence of the Mutiny carried its editorial under the title, "Indian Mutiny". The paper could not publish in details what was going on because of the rigid censorship and the 'friendly advice' given by the authorities. In later days it mainly depended on the official information, and could not provide the details of the activities of the Japanese Navy Third Squadron and the Japanese Volunteer Corps ('Special Constables' in the British official words) which co-operated with the British forces in the suppression of the Mutiny and the guard of the city.

This editorial of *The Nanyo Nichi-nichi Shimbun* is the only one which discussed the character of the Indian Mutiny squarely, and did not deny the possibility that the Mutiny was caused by the will of the Indian officers and men who refused to go to war due to religious and other reasons, or were associated with India's struggle

* Emeritus Professor, Osaka University of Foreign Studies

for freedom. Secondly the editorial wrote that, on the day of the Mutiny, many Indians in their small and big associations 'drank all night long' with joy. Though the paper is cautious enough to say that it cannot confirm whether it was true or not, how this 'rumor' reached their ears attracts our attention, because the British authorities took stringent measures of restriction on the movement of the Indians in Singapore after the Mutiny. Whether these were only preventive measures or the results of some information on the 'unrest' of the Indian community is worth examining. However, the paper prayed for the success of the suppression of the Mutiny from the viewpoint of the Anglo-Japanese Alliance. This basic stance of the paper and the Japanese community in Singapore remained intact in the later days of 1915 despite serious friction between two countries.

After the first reaction to the Mutiny, the concern of *The Nanyo Nichi-nichi Shimbun* shifted to the problems of the treatment received by the members of the Volunteer Corps. This shift cannot be exclusively attributed to the strict censorship. The Anglo-Japanese Alliance and the suppression of the Mutiny was an already established conclusion. Then the main concern of the Japanese community in Singapore was how properly the Volunteer Corps, formed by the urgent request of the British, were treated or not. In fact, in comparison with the 'high morale' of the Volunteers, their food, clothes and quarters were far from satisfactory. Therefore this complaint was directed to the British authorities, and the 'elite' Japanese who worked in the *Gudan* (*Gudang* in Malay, or a corrupted form of *godown* in English) area and returned to Japan after a few years.

2

The contribution of Tamura Yoshichi to the same daily on 6 March 1915 clarified that the Japanese Volunteer Corps were sent as the expression of our 'goodwill', and not from our duty originating with the treaty. Therefore the British side should return their 'goodwill' in response to our 'goodwill'. What he meant by this goodwill is not clear, but it seems that Tamura expected that the British should treat Japan

as 'a big power', which could help 'powerless' British, unlike 'weak' Chinese and Malays. It is amazing that this opinion appeared so early after the Mutiny. However, it was also true that anti-Japanese boycott movement started by the Chinese residents in Singapore as the protest against the Japanese 21 point demands in China was considerably controlled by the British 'goodwill'. In this stage the friction in the Anglo-Japanese relations did not develop more serious turn.

In May and June 1915, *The Nanyo Nichi-nichi Shimbun* followed the peasant uprisings in Kelantan in details mainly on the basis of the official reports. This serious concern reflected the fact that they were still conscious of the strength of the impact that the Indian Mutiny had on the Japanese community in Singapore only a few months back. A different interpretation appeared in connection with a news story, "Kelantan Trouble" given by an 'eye-witness', which might be taken as 'an official account', in the issue of *The Straits Times* 7 May 1915. This report included one sentence, "It is also reported that some Japanese at Khota Bharu offered their assistance". These lines were first interpreted as their offer of assistance for the suppression of the peasant uprisings. This interpretation came from the Japanese experience of the organization of the Volunteer Corps on the occasion of the Indian Mutiny. But, in the 3rd June issue of *The Nanyo Nichi-nichi Shimbun* one report from Khota Baru written by an unknown Japanese said that this meant the offer of assistance for the peasant uprising, and the intention of *The Straits Times* was to impress a bad image of the Japanese among the people. This episode also proves that the experience of the Japanese Volunteer Corps rather promoted the Japanese distrust in the British intention.

In *The Nanyo Nichi-nichi Shimbun* anti-British feelings reached its peak when one Japanese seaman was 'violently' attacked by local police men in the *Hana-machi* (red light district) in Singapore and was taken to a police station on 31 October. This paper became the platform for anti-British campaign. They even suggested the withdrawal of the Japanese Squadron from Singapore, and a manager of one commercial firm threatened the abrogation of the Anglo-Japanese Alliance. However, it is to be

noted that this paper asked the Japanese Consul and the Japanese Association to act within the limits of law, while appealing to the Japanese youth for their open protest in the streets, even preparing for banishment from Singapore. By the way the publisher of the paper Koto Hidezo was one of the office bearers of the Japanese Association. The situation dramatically changed after 10 days.

3

Most of those Japanese who stayed in Singapore for many years, or wanted to do so, lived in the *Shita-machi*, that is, Down Town area, the center of which was the Middle Road. Some of the *Gudan* Japanese saw the Volunteer Corps with their cold eyes, and thought that they were unqualified 'rabble', though the commander Wada Yoshimasa was a manager of the Nisshin Gomu (Nisshin Rubber) and Reserve Lieutenant, and also the *Gudan* people took leading role in deciding the start of the Corps. The Down Town Japanese sent money, clothes and others in the form of 'comfort bags' for the Volunteers and the men of the Third Squadron. They felt close feelings towards the Volunteers in particular. The voice of the Volunteers and the Down Town people who had complaint about the cool eyes of the *Gudan* Japanese, appeared in the readers' corner and other columns of *The Nanyo Nichi-nichi Shimbun*.

The Japanese Volunteer Corps were expected their role as the expression of the collective will of the Japanese residents in Singapore, but the *Gudan* Japanese and the Down Town people contributed to the activities of the Corps in their own ways. Despite that, it was certainly an important step towards the 'unity' of the Japanese, and the Japanese Association was formed on 12 September 1915. The Commander Wada was one of the 22 office bearers of the Association. Simultaneously it is also difficult to deny that the feelings of distrust between two groups increased in this process.

It is from this reason that *The Nanyo Nichi-nichi Shimbun* asked the Japanese Consul Fujii, who, they thought, was well-informed in foreign affairs, but unfamiliar with the Down Town matters, to know the real position of the lower class Japanese

people. The paper thought that the coming coronation of the Taisho Emperor should be run not by the Japanese Association, 'a class organization', but by the Japanese residents themselves.

After the news on the Mutiny spread on 16 February, the *Hana-machi* (another Japanese word for the area is *Steretsu*, a corrupted form of a street) lost its gaiety, and small vigilante groups guarded their area all through the night. Meanwhile the people in this part of the *Shita-machi* also positively supported the Volunteer Corps by sending 'comfort bags' and others. However, *The Nanyo Nichi-nichi Shimbun* only mentioned their house numbers and the names of the streets unlike shop keepers and the *Gudan* people. In comparison with earlier days, the brothels in Singapore were already on the decline along with the expulsion of pimps from Singapore, but it was still a part of the Japanese community in Singapore. The women workers were forced to make their 'unknown contribution' under the adverse circumstance. The *Hana-machi* recovered its gaiety from the night of 21 February, Sunday when the disbandment ceremony of the Japanese Volunteer Corps was held.

The coronation of the Taisho Emperor on 10 November 1915 provided a precious chance to realize the 'unity' and 'equality' of the Japanese people under the Emperor. What the Japanese Association could not realize was symbolically achieved at least on this day of celebration, though the friction between two groups remained in later days too. *Hana-machi* women were not behind in joining the ceremony. *The Nanyo Nichi-nichi Shimbun* wrote that the coronation ended in a harmonious mood. In a sense, the process, which started with the Japanese co-operation with the British in the suppression of the Indian Mutiny, was crystallized into the 'Taisho Nationalism'.

Also what is to be noted is the role of the British in the last stage of this process despite the serious friction between two countries. The British authorities with Malay police men made traffic control on the road leading to the Japanese Consulate where the ceremony was held. This paper was thankful to the British authorities for their arrangement made for the Japanese participants. Their anger ten days before disappeared. In the reception held by the Japanese Consul Fujii, the band of the King's Shropshire

Light Infantry played the Japanese National Anthem. This infantry reached Singapore from Rangoon to help other forces in the suppression of the Mutiny. On this occasion the Governor A. H. Young said that they were proud that Japan had concluded an entente with them five years previous to 1907 when Japan made entents with France and Russia. He continued, "In this war, we, perhaps more than any portion of the British Empire, had felt directly the benefits of that Alliance. It was only at the end of February last that he had the honor of thanking publicly on behalf of the Colony, Admiral Tsutiya, and the officers and men of the Otowa and Tsushima; also the Consul for Japan and the Japanese civilians for the excellent work they carried for us during those days in February last" (*The Straits Times* 11 November 1915). The finishing touch to the image of Japan as 'a big power' was shown here with the 'goodwill' and realistic approach of the British rulers.

4

By the way, Onda and Imamura who were working as hairdressers at the German Prisoners' Camp, told their witness view to the Consul Fujii, who used it for his report to the Foreign Minister of Japan. Onda appeared before the Court of Inquiry too. From their witness we can confirm the cool hearted response of Über Lieutenant Lauterbach and some other prisoners to the mutineers when they entered the camp after killing more than ten persons. However, from these documents it is difficult to know how two Japanese common men thought of the Mutiny. The court of Inquiry is not a place to listen to it. Fujii's report, though it is a very important document, describes the scene in the camp within the framework of the Anglo-Japanese Alliance.

The *Nanyo Nichi-nichi Shimbun* of 19 February 1915 reproduced the talk of a hairdresser, 55, Victoria Street, who heard from Onda and Imamura. Here too the calm attitudes of some prisoners are observed with their eyes. But, there is no description how these two persons saw the Mutiny, and whether they could remain calm observers under the extraordinary situation or not. In fact, Victoria Street was located in the center of the *Shita-machi* or Down Town, and they may have talked

freely as the men in the same profession. But, the Down Town was also the center of support for the Japanese Volunteer Corps, or the center of 'grass root nationalism'. The same paper of the next day reported that the Volunteer Association of Hairdressers presented tobacco for the men of the Third Squadron. Among most of the Down Town people, there was little room for doubt about the step taken by the Japanese community in connection with the Indian Mutiny, and therefore we cannot easily trace from the published sources what was inside the mind of two hairdressers, before and after the Mutiny, who were making daily contact with the 'enemy' prisoners.

5

In the evening of 27 November 1915, the Indian community of Tokyo and Yokohama gave a banquet in honor of the coronation in Tokyo. Lala Lajpat Rai, an Indian nationalist leader who was in Tokyo, presided, and admired Japan as 'the only oriental nation which during a long historical period had preserved its independence under the national dynasty' (*The Japan Advertiser*, 28 November 1915). On the next day two Indian revolutionaries, Rash Bihari Bose and H. L. Gupta were ordered to leave Japan due to their suspected 'collusion' with Germany. It is known from the diplomatic papers that the British Embassy, Tokyo made approach to the Japanese Government in this connection. The movement of two Indians for India's independence in Japan was thought, in the eyes of the Government, an obstacle to Japan's integrity under the Emperor and her way to 'a big and strong power' under the Anglo-Japanese Alliance. Immediately after this order, some Japanese political leaders, journalists and common people started the movement for extending their help to save these two Indians from the official hands. In this process, Japanese co-operation with the British in the suppression of the Indian Mutiny incurred critical comment from these leaders and Indians including Lala Lajpat Rai.

However, *The Nanyo Nichi-nichi Shimbun* wrote in its editorial dated 6 January 1916 that we were waging war against Germany in co-operation with the British, and if there was the fact that two Indians were in 'collusion' with Germany, they

were the 'enemy', not political refugees who were to be protected. This paper asked the Government to publish the correct reason for this order, and remove the misunderstanding inside and outside Japan, but warned that we should not be prompted by fragmental chivalrous spirit, and not make serious mistake in the important issue of the country. The author of this editorial was Tsukuda Tekigai (Most probably this is a pen name of Tsukuda Koji who joined the paper in March 1915, and was later the author of *Nanyo Yori* (From Nanyang). The English translation of the book was distributed in the British military circle). Singapore was the forefront of the Anglo-Japanese Alliance. The Alliance was tested on the occasion of the Indian Mutiny. Just because Japan proved its 'usefulness' there, *The Nanyo Nichi-nichi Shimbun* was not driven by 'chivalrous spirit'. The Japanese in Singapore, or at least this paper gave their 'goodwill' in return for the 'goodwill' they received. It is another matter how this 'goodwill' affected the later history of Singapore and also the history of Indo-Japanese relations in later years.

The Nanyo Nichi-nichi Shimbun describes vividly the life and thought of the Japanese residents in Singapore, and the Down Town Japanese in particular. The paper reacted sharply to the Anglo-Japanese relations, but the examination of the meaning of the Indian Mutiny in the contemporary context was outside its scope, though both the mutineers and the men who escaped into the jungle after the Mutiny had their own idea of the war and freedom.

The Indian Mutiny in Singapore encouraged the peasant uprising in Kelantan by way of the rumor that the British rule ended in Singapore. The rumor worked, because the Indian Mutineers and the peasants in Kelantan refused to be sported by the world war or the world economy, though the suppressors tried to describe their action as 'a storm in a tea cup'. Therefore the message of the Indian officers and men of the Fifth Light Infantry reached Kelantan, passing through the net of censorship. In 1915 the 'histories' of the various parts of the world crossed each other in Singapore and people were expected to have their perception of this reality beyond 'national' boundary.

Post Script:

On the occasion of the conference on Southeast Asia which was held at the New Zealand Asia Institute, University of Auckland in February 2006, I read a paper, which only showed some points waiting clarification in my work on the Indian Mutiny since I published or, correctly speaking, wrote *The Mutiny in Singapore*. It will be reproduced with slight revision in *New Zealand Journal of Asian Studies*, 11, 1 (June 2009).

Here I tried to clarify these points with the use of *The Nanyo Nichi-nichi Shimbun*, though I could realize it only partially. This is a digest in English of my paper written in Japanese.

I could read a microfilm copy of the newspaper (a collection of the British Library) at the Central Library, Waseda University, Tokyo.

I would like to express my thanks to Professor Nicholas Tarling for his kind interest in my work since 1988.